2026年度　入学試験問題

国　語

（帰国生入試）

［注意］

1．試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。

2．解答用紙は、問題冊子の中にはさんであります。試験開始の合図があったら、解答用紙を取り出して受験番号と氏名を記入し、QRコードシールをはりなさい。

3．解答はすべて解答用紙に記入しなさい。

4．問題冊子の余白等は自由に使って構いません。

5．試験終了後、解答用紙のみ提出し、問題冊子は持ち帰りなさい。

東京都市大学付属中学校

【注意】国語の問題では、字数制限のあるものは、特別な指示がない限り句読点等も一字に数えます。

1　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

かつて日本でもよく引用されたドイツの詩人カール・ブッセの「山のあなたの空遠く」という言葉ではじまる詩がありますが、どこか山の向こうに未知の世界があり、それが自分たちの世界とまったく違ったユートピアのようなところだという意識は、世界のどこに行ってもあるようです。「桃源郷」や「蓬莱山」、「地上の楽園」など、人間の理想の投影としての異世界については、神話や伝説などが、いろいろなところで語り伝えています。

実際、山のあなたへ行ってその現実を見ると、そこはユートピアでも楽園でもなくて、逆に地獄だったなどということもあるのかも知れないのですが、といって日常の世界は平凡で面白くない。となると、人間には「異世界」に対する憧れがどうしても出てきます。それは人間にとっての本源的な衝動の一つとしてあるとしか思えないようにも感じられます。①そうした衝動はおそらく、異文化について考えるときにも発動します。異文化に対する憧れは、自分の日頃接するものとは違ったものへの関心であり、自分たちの文化にはないものをよそに見出そうとする、〝ないものねだり〟でもあるのでしょうが、私にはそうした異文化への関心こそ人類にとっての基本的な関心であり物事を発展させる重要な動機の一つであるように思えてなりません。

人類学では、②人間社会の発展は、「族内婚」、すなわち同じ一族の中で結婚を繰り返していた状態から、「族外婚」、よその集団の人たちと婚姻をするようになって初めて人間の集団が大きくなった。外へ向かっていったことから社会集団の発展が起ったと一般に考えられています。すなわち、族外婚によって今日の社会への発展の基礎ができたと言っているのですが、その他の面においても何か違ったものを取り入れることによって自分たちの生活がより豊かになるという〝智恵〟は、人類にかなり共通してあるように思います。

おそらく、それが人間と社会の古代から現代まで依然として変わらない異文化への大きな関心の源なのでしょう。また、異文化を理解するうえで、改めてそういう人間の生活の基礎になるような異文化への関心をいま一度見直す必要があると思います。［1］

異世界・異文化への憧れは、人間社会の発展のために必要な変革にとっての原動力となることがあります。その端的な例は、③日本の近代です。

たとえば、「黒船到来」以降、日本人は、西欧やアメリカなど科学技術の発展した先進社会に対し、追いつけ追い越せと「文明開化」を行なってきましたが、同時に西欧やアメリカに対して、異文化としての憧れを持って、その憧れを実現するために近代化を行なった側面があります。欧・米がもし憧れに値するような世界でなく、単に軍事力などが強いだけであれば、日本の近代化は別の形をとったかもしれません。ましてや、現在でもなお何かあると欧・米の例を上げずにはい

ないような、「アメリカや西欧に対する限りない接近」という衝動は日本人の間に生み出されなかったのではないかと思われます。

日本の近代化は、単に技術的な側面での「A魂B才」で対すればよいというわけではなかったと思います。全面的な「西欧化」ではないという「A魂B才」的な「自立」のスローガンは必要でありましたが、実のところ近代日本にとっての西欧文化は、現在に至るまで強い憧れの対象となり続けてきました。その西欧文化への憧れは未だに非常に強いものがあって、今でも何かというとパリやロンドン（そしてニューヨークやロサンジェルス）に行こうとしますし、日本がこれだけいろいろな機械製品を製造するようになり、現代国家としては互角か互角以上の経済力を持っても、たとえば雑誌は依然として毎週毎月のように、パリ、ロンドン、ウィーン、ニューヨークなどの特集を組み欧・米の文化への憧れを人々に伝達しています。こうした憧れの強さ、深さが、日本の近代化の一つの原動力だったと思うのです。［2］

近代日本にとっての西欧は、科学技術的にも社会としても非常に発達した社会であり、「文明」のモデル足り得る存在でした。またその文化も、哲学や文学、音楽から建築に至るまですべて日本人が憧れることができ、理想として追求したくなるようなものでした。自分の世界でそれと同じものを作ることは出来ないとしても、理想として追求しようとしたことは事実です。また西欧クラシック音楽とそのオーケストラに、歌手にオペラに、西洋美術展にと、音楽や美術や文学などでは限りなく西欧に近いスタイルがそのまま輸入されることにもなっています。多くの面で西欧の文化は日本人の学習の対象になりました。それが日本の近代化、現代化の原動力になったわけですから、「異文化に対する憧れ」が果たした役割は非常に大きいと言うべきでしょう。

では逆に近代以前は別として近代の発達した西欧から見て、非西欧世界の異文化はどう感じられていたのでしょうか。そこにもやはり異文化への憧れがありました。［3］

たとえばルソーには、「④高貴な未開人」という有名な言葉があります。これはルソーが生きた時代のヨーロッパを、「科学技術、文明として発達はしているが、人間の心が純粋さを失い、汚れ、高貴な人間性が失われてしまった社会」と断じ、それに対して、当時断片的な知識として入ってきていた南太平洋の島々に住む人々の世界を、「人間性が非常に純粋に保たれて、西欧のような汚濁した世界ではなく、その住民は未開人であるが高貴な未開人である社会」と捉えて、「その点こそ西欧に欠けているものである」と、称揚する文脈の中で語られた言葉でした。いずれにしても、そこには、南方の異世界に自分たちが失ったものをまだ保持しているユートピアを見つけたいという衝動と同時に、異文化に対する憧れが感じられます。

西欧にとっての異世界、異文化を憧れの目で見たのは、もちろんルソーだけではありません。アメリカの文化人類学者マーガレット・ミードは、一九二八年に出版されたオセアニア研究の有名な著作『サモアの思春期』という本の中で、大要以下のような事柄を述べています。「アメリカや西欧社会では性というものがキリスト教の影響もあり非常に抑圧されており、社会におい

ても男女関係においても非常にいびつな形で表現されている。しかし、サモアではそういうキリスト教的な抑制がないから、人々は性に対して非常に伸びやかで開放的な態度で対することができる」。サモアの地を一種の理想郷として描いているわけです。そして、「文化はそれぞれ独立した価値を持つものであって、その文化には上下関係はない。巨大な中国文化であろうがサモアの小規模な文化であろうが、どちらも一つの文化として独立した価値がある」という「⑤文化相対主義」の考え方を展開しました。

こうした主張をする文化相対主義はこの本が広く読まれた一九二〇年代末ぐらいからアメリカの人類学者を中心に主張されはじめた考え方ですが、その相対主義という考え方そのものが、⑥近代のキリスト教的な西欧文化に対する批判を含んでいます。

西欧やアメリカの人々が以上のように自文化を批判的に捉え、その一方で何らかの異文化に憧れを抱くに至ったのは、もちろん文化人類学者だけではなく、旅行家などを含めて西欧人が徐々に非西欧世界を〝発見〟していって、その文化のあり方を深く知るようになり、そこに西欧とは違った価値とか違った美と芸術、違った人間関係のあり方や別の形の社会秩序、自然との調和的関係などを見出したからでした。それらの内容が示すものは西欧世界にとって文化的に非常に大きな誘惑であり、憧れとなるものでした。タヒチへ行ったゴーギャンや、日本へ来たラフカディオ・ハーン（小泉八雲）など、非西欧世界の魅力にとらわれてはるばる南太平洋や極東へ出かけて行き、そこに住み着いた人も多く存在しました。そしてそこまではしないまでも、アジアやオセアニアの異文化に憧れた西欧人の例は数多くあります。［4］

ですから、工業的に発展しているからその文化がすばらしいかというと必ずしもそうではなくて、「未開」状態にあるとか、科学技術や工業的な面ではまだ発達段階にあるような文化であっても、逆に⑦その「未開」さや発達段階にある「よさ」を見つけ出し、自分たち西欧には存在しない美や価値の世界として憧れることもあるわけです。その場合も一種の〝ないものねだり〟と言っていい面があると思いますが、人間には他人の家の食事がおいしそうに見えるということと同じように、他の文化は非常に優れたものに見える傾向もあるということではないでしょうか。

（青木　保『異文化理解』より）

問1　次の文章はもともと文中にあったものです。どこに入れるのがふさわしいですか。あてはまる部分として最もふさわしい場所を文中の［1］～［4］から一つ選び、番号で答えなさい。

そういうものがなくて果たして日本の急速な近代化が可能だったかどうか。私は、非常に難しいところだと思います。

問2　――線①「そうした衝動」とは、どのようなものですか。文中より十五字以内でぬき出しなさい。

問3　――線②「人間社会の発展」とありますが、人類学上の「発展」の説明として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　異質なものを受け入れることで、自分たちの暮らしを向上させたり、集団の人口を増やしていったりしたこと。

2　一族の中での結婚に疑問を持つ意見が出始めたことで、一人ひとりの考えが見直されたこと。

3　一族の中から異質な人を排除し、代わりの人を外部から補うことで、集団が大きくなっていったこと。

4　自分たちの過去の失敗から学ぶことで、集団の中で生きる智恵を獲得していったこと。

問4　空らん［A］・［B］を含む四字熟語は「日本固有の精神を保持して欧米の知識を学びとること。」という意味を持っています。この意味になるように空らん［A］・［B］に当てはまる漢字をそれぞれ一字で答えなさい。

問5　――線③「日本の近代」とありますが、日本の近代について説明したものとして最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　科学技術が発展した欧米を参考にしつつも、日本の精神文化を維持した。

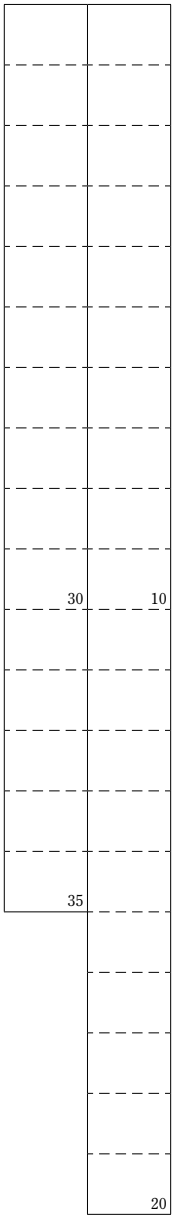
2　欧米の発展した科学技術を見習うだけではなく、文化も理想として追求した。

3　科学技術が発展した西欧に打ち勝つために、単なる真似ではなく独自の工夫をした。

4　欧米の文明をモデルにすることはせず、音楽や美術や文学などの芸術を参考にした。

問6　――線④「高貴な未開人」とはどのような人たちですか。三十五字以内で説明しなさい。

（下書き欄）



問7　――線⑤「文化相対主義」を説明した次の文の空らん［Ⅰ］・［Ⅱ］にあてはまるように、［Ⅰ］には六字のことばを、［Ⅱ］には四字のことばを文中からぬき出しなさい。

［Ⅰ］を持つ文化の間には、［Ⅱ］がない、という考え方。

問8　――線⑥「近代のキリスト教的な西欧文化に対する批判を含んでいます」とありますが、「批判を含む」のはなぜだと考えられますか。その理由として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　アメリカの人類学者が提唱した考え方に旅行家たちが異を唱え始めたから。
2　近代とそれ以前のキリスト教とでは他文化に対する考え方に違いがあったから。
3　文化人類学が盛んになる前の西欧にも相対主義に近い考え方があったから。
4　キリスト教を中心に据える西欧には今まで他文化を認める余地がなかったから。

問9　――線⑦「その『未開』さや発達段階にある『よさ』を見つけ出し、自分たち西欧には存在しない美や価値の世界として憧れることもある」とありますが、これを西欧に限らず身のまわりに置きかえたたとえとして最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　日本人が自国の音楽よりも西欧の音楽に芸術性を見出す。
2　中学生が超能力や霊能力といった超常現象に興味を持つ。
3　現代の日本人が縄文土器の文様に美を見出して評価する。
4　小学生が作った大人顔負けの作品が大賞に選ばれる。

（問題は次のページに続きます）

2　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

本棚の中の画集の何冊かは上下さかさまに突っこまれている。収納ラックに置かれた石膏像はそっぽを向いたり、背中を見せていたり。こういうの、苦手だ。直したくて体がA する。そういうふうに育てられたからだ。

このザマは何？　年のせい？　もう正しい母親の役を降りて、①自分のルールブックも破り捨てたの、ママ。

「よけいなお世話です。触らないで」

はいはい。［1］

「でも、ひとつだけいい？」

私はサイドテーブルを指さした。そこには母親が手にしている円形パレットとは別の、屋外用の角形パレットが置かれている。何日も使っていないに違いない。載せた絵の具がすっかり干からびていた。桃の缶詰のケースに林立している筆も、どれも絵の具がこびりついたままだ。

「使ってない筆やパレットはこまめに洗えって、私は誰かさんに教わったんだけど？　これもこのままでいいの？」

左右非対称の描き眉がくりっとつり上がった。

「いいえ、使ってますとも。全部いま使ってます」

母親は桃缶のケースから穂先が固まってしまっているラウンド筆を抜き出して、乾燥して罅の入った角パレットの絵の具をこすりはじめた。［2］

「ねぇ、覚えてる、私に言った言葉」

母親は震える指先でテレピン油を角パレットに注ぎ、絵の具を溶かしはじめた。私は言葉を続けた。

「私にこう言ったんだよ。自分の暮らしをきちんとできない人には、絵を描く資格も、生きていく資格もないって」

ラウンド筆を握った母親がキャンバスに向かったが、手は動かさなかった。何の絵かは知らないが、画家なら必要のない色はけっして塗らない。［3］

「忘れたなんて言わせないからね」

私はその言葉にa呪縛されて生きてきた。信じてきたとも言える。どんな職業についていた時も。

母親が筆を下ろして私にむき直った。ほうれい線を深く刻んで唇をすぼめる。そうすると唇の周りに初めて見る縦じわができた。私に言葉の弾丸を浴びせかけてくるのだと思っていたのだが、ぼんやりした目をむけて、こう呟いただけだった。

「なんのこと？」

覚えてないの？　私がずっと忘れずにいた言葉なのに。［4］

母親の瞳の焦点がようやく私に合う。いま気づいたというふうに彼女は言った。
「そう言えば、あなた、絵は描いてる？」
「まさか」
じつは描いていた。水彩でときどきだが。いまの仕事柄、時間の取れる午前中、ジョギングを終えた後に。
「学校はどうしたの」
「え？」
いまさら何を言っているの。美大に落ちたことを蒸し返すつもり？
「今日、学校は？」

え？

「課題は終わったの？※美大って課題がすべてなのよ」
②私はようやく気づいた。※充が言っていた母親の病気がどういう種類のものなのか。
次の言葉を発するのには、長い間と勇気が必要だった。でも、聞かねばならないことだった。
「……私が誰だかわかってる？」
母親が眉根を寄せ、肉の薄い頬をひきつらせる。怒っていることはすぐにわかった。昔の私にしょっちゅう見せていた表情だから。その表情を昔の私はいつも窺っていたから。
「あたりまえでしょう……あなたは……」
たぶん、名前を思い出せないのだ。だが、プライドの高いこの人は、そのことをけっして認めようとしない。
「あなたは……わたしの……娘よ」
視線が私の表情を手探りしていた。その目は怯えて揺れているように見えた。
たぶん、少し前まで、私が自分の娘であることも理解していなかったのだと思う。
全部、忘れているのだ。私が忘れようにも忘れられない、いままでのすべてを。
「カップ、洗ってくる」
私は母親から顔を逸らし、他に何も思いつくことができずに、トレイを抱えてアトリエを出た。

母親は夏の暑さも忘れ、テレピン油の酷い臭いにも気づかずに、汗を流し化粧をまだらにしながら絵を描き続けているだろう。落書きのような絵を。
私はキッチンに行き、カップを洗い、③そして泣いた。
ずいぶん時間が経ったように思えたが、対面式キッチンの向こう、ダイニングの掃き出し窓から見える庭には、あいかわらず夏の午後のb容赦ない陽射しが降りそそいでいる。今日の天気は、パーマネントイエロー。

花のない庭を少女が駆けていた。
あのおかっぱ頭の女の子だ。
ひまわりの柄のワンピースをひるがえして、小脇にスケッチブックを抱えて。きっと絵画教室の課題である、夏の花を必死で探しているのだ。

夕方にのむ薬を探しに行った母親の寝室は、酷いありさまだった。
洋服箪笥の引き出しがすべて開けられ、抜き出されたワンピースやスカーフやターバンが、床やベッドに散乱している。ベッドは手すりとリクライニング機能が付いた介護用だ。
十六年前と同じ質素な化粧台の上には、母親の使う化粧品がありったけぶちまけられていた。
鏡に母親自身の文字で、こんなメモが貼られている。
『杏子　ＰＭ２：００』
私が訪れることを充から聞いて、着るべききちんとした服を探したのだろう。必死で化粧をしたのかもしれない。衰えを隠すために。自分が十六年前と少しも変わらない、と私に認めさせるために。おかしなところは少しもない、と思わせるために。
片づけておこうかと思ったが、やめておく。個性派女優を演じ続けてきた人の舞台裏だ。見なかったことにしてあげよう。
私は家を出て、駅前のスーパーマーケットへ行き、食材を買いこむことにした。得意とはいえない料理をし、冷蔵庫につくり置きをストックするためだ。ピーナツバターを塗るためのパンも必要だな。桃も買い足して、コンポートをたっぷりつくっておこう。

コップを載せたトレイを手にして私がアトリエに戻るなり、母親はまだらの顔に警戒の色を浮かべた。
「薬は要らない。頭がぼんやりしちゃうから」
「でも、五時にのむんでしょ」
母親が首を振って、私に言った。
「娘が来てるの。しっかりしてなくちゃ」
また私は、彼女の頭の中で、違う誰かになってしまったようだ。母親はキャンバスを顎でしゃくって、私じゃない誰かに言う。
「見て、吉田さん。絵ができた」
絵、といってもただの色とりどりの模様だ。淡い赤と薄い青と黄色の三色が、三本の太く短い柱のように塗り重ねられている。バックは緑色。
私は首をかしげた。実際に首を左右にひねって絵を眺める。何を描こうとしたのだろう。
「何か意味があるの」
頬に塗られた濃すぎる紅が、作品の完成に紅潮しているように見えた。キャンバスの中ほどを

筆先で指して言う。
「これは、わたしの娘」少し眉を曇らせてから言葉を続ける。「まだ子どもだったのに亡くなっちゃった上の娘」
久しぶりに母親の絵の解説を聞きたくて、私は調子を合わせることにした。
「お名前は？」
母親が困った顔になる。
「蓉子さんじゃないですか」
「そう、蓉子」
母親は姉の絵を描いていたのか。だが、解説にはまだ続きがあった。筆先を右に動かして青色の柱を指す。
「これは……えーと」何度か、えーとをくり返してから、安堵のため息を漏らすように言った。
「充。青は充。わたしの息子。もうすぐ結婚する」
そうか、最初の筆先は、真ん中の赤い柱を指していたのだ。
「じゃあ黄色は」
母親が唇の周りに縦じわをつくって口ごもる。助け船を出そうと思ったが、怖くてできなかった。「これは夫」と言われそうで。
母親が声をあげた。思い出せたことに興奮した早口で。
「杏子」
「杏子？」で、いいんだね。
「そう、杏子。下の子。美大に通ってる。わたしと同じ画家になるの」
妄想の中だけでも、美大に通わせていただいて、光栄。いや、素直に言おう。嬉しい。
それから、背景の緑を指して「パパ」と言った。
「わたしの夫。ぴったりでしょ。いつもみんなの後ろにいるの。それでね、それでね」
母親が私の腕をつかむ。こんな姿は見たことがなかった。ヨシダさんという名前らしい介護ヘルパーさんには、いつもこんな話し方をしているのだろう。独りになって、年をとって、病気になって、ようやく甘えられる人を見つけたのだと思う。それまでの針鼠みたいに周囲を警戒し続けた人生には、ついぞいなかった。
「この小さな白い点、これはうちの猫。とっても可愛いの。あれ、どこにいっちゃったんだろう」
どこかで猫が昼寝をしているとでもいうふうにアトリエを見まわしている。口を尖らせてから、すぐにすぼめたのは、呼ぼうとして、名前を忘れたことに気づいたからだろう。
「マユだね」
そう言うと、母親は両手を口にあてがい、子どもみたいに両目を［B］動かした。この人にだって幼い頃があって、きっと、こんな表情を見せることもあったのだ。
「ふふ、そう、名前、ど忘れしちゃった」

キャンバスをうっとりと眺め続けている母親に尋ねてみた。

「逸子さんはどこにいるの？」

「わたし？」

母親がくすくすと笑った。［X］。

「わたしはここにいるじゃない」

「いつもありがとうね」

母親が笑っている。家族にはめったに見せなかった笑顔。c他人行儀な愛想笑いだとわかっていたが、儀礼的に微笑み返した。頭をさげてきたから、私も会釈した。私が顔を上げても、まだ頭をさげ続けていた。

ここへ来たら、言おうと思っていたことを、私はもうひとつ思い出した。

私、自分の店を持つことになったんだ。あなたには「下品ね」と眉をひそめられるだろう夜の店だが、必死で働いて、自分を殺して、時には闘って、そういう女だと思われないように針鼠になって［Y］だけはきちんとして、そうやって手に入れた店だ。

でも、私の口からこぼれ出たのは、まったく違う言葉だった。絶対に言わないはずだった言葉。

「また来るから」

来た時には夏はまだ続くのだと思っていたのに、季節がいつのまにか秋に変わっていることを帰り道の私は知る。

夕刻の風はひんやり冷たくて、駅前のロータリーの円形花壇に咲くコスモスをゆらゆらと揺らしていた。

コスモスの花群れの中に、白いワンピースの女の子が立っていた。ワンピースのそこかしこにひまわりの花が咲いている。あくまでもモチーフだから、色は水色。

ずっとここにいたんだね。

駅にむかう私の後を少女がついてくる。学校が終わり、友だちとも遊べずに、［C］家への坂道を登る時の足どりで。

陽はもう西に傾いていて、ホームのそこかしこに長い影をつくっていた。

私のつくる影はひとつだけだったけれど、私は二人で電車を待った。

ごめんね、ずっとほうっておいて。

④でも、もういいんだよ。

上り列車がホームに滑りこんでくる。

そして私は一人で乗った。

（荻原　浩「いつか来た道」より）

※美大……美術大学の略。
※充……「私」の弟。母親に会いに行くよう「私」に勧めた。

問1　次の文は、もともと文中にあったものです。どこに入れるのがふさわしいですか。最もふさわしい場所を文中の［1］～［4］から一つ選び、番号で答えなさい。

私は、自分がここへ何を言いに来たのかをあらためて思い出した。

問2　――線a「呪縛」、b「容赦ない」、c「他人行儀」の意味として最もふさわしいものを次から一つずつ選び、それぞれ番号で答えなさい。

a「呪縛」
1　心理的な強制によって、人の自由をうばうこと
2　相手を激しく憎み、不幸をもたらそうとすること
3　厳しく人を責めることで、無理やり信じさせること
4　忘れないように、心に深くきざみつけること

b「容赦ない」
1　途切れることなく、穏やかな
2　受け入れられないくらい、残酷な
3　忘れられないくらい、印象的な
4　手加減のない、厳しく強烈な

c「他人行儀」
1　遠慮がなくなれなれしいふるまい
2　改まったよそよそしいふるまい
3　おもいやりがなく薄情なふるまい
4　相手をおもいやる丁寧なふるまい

問3　空らん［A］～［C］にあてはまることばの組み合わせとして最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　A　いらいら　B　そおっと　C　だらだらと
2　A　うずうず　B　びくっと　C　うきうきと
3　A　むずむず　B　くるりと　C　のろのろと
4　A　ぶつぶつ　B　ぱちりと　C　いそいそと

問4　――線①「自分のルールブックも破り捨てた」とありますが、これは母親が具体的にどのようにしたことを言っていますか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　娘のやることに関わらないことをやめ、学校に通っているかを気にし始めたこと。
2　身の回りを整理することをやめ、使っていない道具も洗わずそのままにしていたこと。
3　娘に対してことばで攻撃（こうげき）することをやめ、ぼんやりとして呟いただけだったこと。
4　五時に飲むはずの薬を飲むことをやめ、娘のために絵を描き続けていたこと。

問5　――線②「私はようやく気づいた」とありますが、どのようなことに気づいたのですか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　母親は「私」が美大に落ちたことを蒸し返すつもりで、皮肉を言っているのだということ。
2　母親が頬をひきつらせる表情をしているので、「私」に対して怒っているのだということ。
3　母親は病気のせいで、「私」が娘だということを忘れてしまうくらいの状態であること。
4　母親が充の言っていた通り重い病気にかかっており、長くは生きられないのだということ。

問6　――線③「そして泣いた」とありますが、「私」が泣いた理由となることとして**ふさわしくない**ものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　画家だった母親の今描いている絵が、落書きのようであったこと。
2　以前はきちんとした身なりを好んだ母親の化粧がまだらになっていたこと。
3　母親の視線が「私」の表情を手探りし、目が怯えて揺れているように見えたこと。
4　母親が昔の「私」にしょっちゅう見せていた、怒っている表情を見せたこと。

問7　空らん［X］にあてはまることばとして最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　娘をいたわる優しい声で　　2　皮肉な、あざ笑うような声で
3　少女のような無邪気（むじゃき）な声で　　4　心配そうに、か細い声で

問8　空らん［Y］にあてはまる六字のことばを文中よりぬき出しなさい。

問9　――線④「でも、もういいんだよ」とありますが、本文全体をふまえると、この部分はどのようなことを意味していますか。その説明として、最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　「私」が母親から学んだことは、「私」の今の生活の土台となっていることに気づき、幼いころに母親に反抗していた象徴である「白いワンピースの女の子」を置き去りにすることで、これからは反抗することをやめて母親の言うとおりに生きることを決意し、今までつまらないことにこだわっていた自分を解放しているということ。

2　「私」の心の中には、母親に対する過去からのわだかまりが複雑な感情としてずっと存在しており、その感情の投影として、「白いワンピースの女の子」が私の前に表れていたが、今回の再会で母親への思いが変化し、母親に抱いていたわだかまりが消えようとしている中で、「白いワンピースの女の子」に別れを告げたということ。

3　「白いワンピースの女の子」と二人で静かに電車を待つことで、自分を冷静に見つめなおし、母親との再会によって受けた強いショックを和らげることができたので、「白いワンピースの女の子」はその存在理由を失ってしまい「私」の中からいなくなり、落ち着きを取り戻した「私」は、母親に対して心から謝罪をしているということ。

4　「私」にだけ見える「白いワンピースの女の子」は、「私」の少女時代の母親への思いが現れた存在だと言えるが、母親に再会したことにより、ますます母親への怒りの気持ちが高まり、母親へのわずかな愛情もなくなり、「私」は母親から完全に独立することができ、「白いワンピースの女の子」を追い返そうとしているということ。

問10　本文の表現の特徴について説明したものとして最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　物語は「私」と母親の思いが交互に表現される形で進行していき、母親の「私」に対する気持ちの変化が、物語の前半と後半の描写によってわかりやすく表現されている。

2　物語は会話文を中心に語られていき、特に母親が吉田さんに自分の家族について描いた絵のことを語る場面では、母親が楽しんでいる気持ちが生き生きと表現されている。

3　物語は過去と現在が混在した形で語られており、「私」が美大に落ちたことや、「私」の姉が亡くなってしまったことなどが、物語の中で大きな意味を持っている。

4　物語は「私」の視点で語られており、セリフではない部分においても「私」の心情が詳しく表現されている一方で、母親の気持ちの描写は「私」の想像の域を出ることはない。

3　次の詩を読んで、後の問いに答えなさい。なお、用字・かなづかいは改めました。

六月の蜜柑水　　北園　克衛

永遠に咲かない薔薇がないように
詩よ！　僕の指にも咲きたまえ

夏の優しい夕暮れに
花束を買う街のひとたち

あなた達の静かな頬に咲く
※微笑のように微笑のように

（『若いコロニイ』より）

※微笑……ほほえむこと。

問1　この詩に**使われていない**表現技法を次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　反復法　　2　倒置法　　3　直喩法　　4　擬人法

問2　この詩で作者が最も言いたいことが書かれている行をぬき出し、はじめの三字を答えなさい。

問3　この詩は、いくつかの異なる対象に対して共通することばを使うことで、読者に豊かなイメージを伝えようとしています。そのことばを言い切りの形で答えなさい。

問4　この詩全体から読み取れる思いを説明したものとして最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　自分がつくった詩が人々の心にとどき永遠に残ってほしいと願っている。
2　読む人の心をさりげなく明るくするような詩をつくりたいと思っている。
3　自分の詩によって人々に生きる力をあたえることができると信じている。
4　それぞれがイメージをふくらませ詩を自由に読んでほしいと感じている。

問5　この詩の題名「六月の蜜柑水」からはどのような効果が感じられますか。その説明として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　詩の内容とはかけ離(はな)れたことばによって読者の不安をかきたてる効果。
2　詩の内容にまったくこだわらず読者に自由に詩を味わってもらう効果。
3　詩の内容と響(ひび)きあうことにより読者にさわやかな印象をあたえる効果。
4　詩の内容に重ねて読むことで読者のイメージをひとつに固定する効果。

4　次の各問いに答えなさい。

問1　次の各文の――線のカタカナを漢字で書きなさい。

1　コウドウでは常に自動車に気をつける必要がある。

2　総理大臣のシジ率の変化を追う。

3　長いイシダンをのぼって神社へ行く。

4　一日に一回は親コウコウをしようと決めた。

5　みんなで何かをなしとげるためにはキョウチョウ性が大切だ。

問2　次の四字熟語の空らん□には、すべて漢数字が入ります。A～Eの四字熟語に使われる漢字の組み合わせと同じ組み合わせになるものを後の選択肢（せんたくし）1～7から一つずつ選び、それぞれ番号で答えなさい。

A　□者択□

B　□寒□温

C　□苦□苦

D　□載（ざい）□遇（ぐう）

E　□差□別

【選択肢】

1　□発□中

2　□日□秋

3　□転□倒（とう）

4　唯（ゆい）□無□

5　□変□化

6　再□再□

7　□方□方